
FAIRYTAILの世界に転生！

takuyawhite

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRYTAILの世界に転生！

【Nコード】

N4958X

【作者名】

takuyawhite

【あらすじ】

転生した先の世界はなんとFAIRY TAIL!？
光と闇の魔導の力をもった主人公が
世界を救うかもしれない・・・

転生？

「あれ、頭が痛い……」
「ダメだ、立つてられない……」
「俺、死ぬのかな？……」

「早く起きろ、バカタレツツッ！！」
「痛つつつた！！！」

なんだここ？

俺は目を覚ますと見知らぬ場所にいた。

「おい、その奴、ここはどこよ？」

「つたく、近頃のガキはこれだから困る。」

礼儀を知らんからな。」

「そんなことごとくどうでもいいから、ここどこよ？」

「仕方ないな。ここはだな、人間の世界で未練を残して

死んだものが通る場所だ。」

「えっ……」

もしかして、俺って死んでる？」

「ああ。でなければ、ここにはおらんからな。」

「くりびつてんぎよのいたおどろ！」

人間の世界には戻れないのか？」

「無理だ。」

「どうしても？」

「不可能だ。」

「お願いしますっ！」

「まだ、彼女と別れて無いんです。」

「知るか。は、いい、それでは転生を

始める。」

「はあ！？ふざけんなよ？」

「ここでは、あなたの望む世界にあなたが望む形で

転生出来てしまいます。」

「無視かよ……。」

「どこの世界がいいですか？」

「どこにしようか？」

「そうだ、あそこだっ！」

「ええと、俺が「FAIRY TAIL」の世界ですね。了解しまし

た」人の話聞けっ！」

「人の話は聞きますが、霊魂の話は聞きませんw」

「コイツ……。」

「そのほか、特典オプシオンは何がよろしいですか？」

FAIRY TAILって確か、魔法が使えるだったな……

「じゃあ、光と闇の魔法が使えるようにしてくれ」

ドラゴンスレイヤー

「滅竜魔導士と普通の魔導士のトッピングはどうされます

か？」

「ドラゴンスレイヤーのトッピングをお願いします。」

「ほかは？」

「ないです」

「それでは………いってらっしゃい……！」

「はい？………うわぁっ……！」

俺は目の前が真っ白になった………

転生？（後書き）

始めまして。

初心者ですが、お願いします。

マダノリアのフェアリーテイル（前書き）

オリジナルな回です。

もしかして、森を破壊してしまったー!?

「本当にお前はなんてことを……」

「すいません。今すぐもとに戻します……」

「そんなことできるわけ」「治癒・再生の光ヒールングレディンファンつ!!」「治った!?!」

「これでどうです?」

「うむ、治ったのであれば問題無い。

ところで、お主これからどうするんじゃ?」

どうするか? どうしよう? 先のこと考えてなかった

「特にないけど……?」

「それなら、うちのギルドに来ないか?」

「ギルド?」

「来てみればわかる。ほれ、付いてきなさい」

「はい……」

「ごごじゃ、ごご」

「でかいなあ。」

「まあ、なかに入りなさい」

「失礼しまーすって何じゃこりゃあああああ!?!」

「やんのか、ナツ。このやるう」

「上等だ、グレイ」

「喧嘩なら他所でやってよ」

「やるのか、エルザ?」

「ミラジエーン、後悔するなよ」

「ったく、うるせえなあ・・・」

「すみません、ここ何か危ないところですか？」

「やめんかあああああああ、クソガキ共!?!」

「。。。おかえり(なさい)、マスター」

「グレイ、逃げだしやがって、俺の勝ち「パンツッ!?!」。。。。」

「

「マスター、こいつは?」

「おお、こいつはな、そこであつてな、

フェアリーテイルに入るそうじゃ」

「はい? 今なんと?」

「何イ!?! それなら俺と勝負しろ!?!」

「やだよ、めんどくさいし」

「なんだと！？てめえ？」

「これでも喰らえ、火竜の鉄拳っ！！」

「邪魔だ……。」

と言つて手に力をいれ、指を上にも曲げる。

すると、ナツ？とか言った奴が天井にあたって、

気絶していた。

「あのガキ、触れずにナツを天井にぶつけやがった」

「なんちゅう奴だ」

「お前さんはやつぱり、強いのう」

「そうですか？つてか、僕まだ入ると言っていないですけど……」

「マスター、次は私が戦う（ます）」

「しょうがないな。お主、こういうのはどうじゃ？」

「こういうの？」

「このギルドから3人メンバーを選ぶ。

もし、お主が3人全員に勝てたら、

おまえさんの好きにすればよい。

ただし、負ければおとなしく入ってもらつ、よいな？」

「いいですよ、別に。負けなければいいですよね？」

「そうじゃ。それならメンバーを選ぶ。

1人目はミラジエーン。「よっしゃあ」

2人目はエルザ。「よし」

3人目は……ギルダーツ。「え、俺？」

以上じゃ。」

「……終わったな。」

「あの、ギルダーツがいるなら、無理だな」

なんだと、俺の力見せてやるっ！！

マグノリアのフェアリーテイル（後書き）

グダグダですいません。

主人公の名前はまだ考えてます。

悪魔V光のドラゴンスレイヤー（前書き）

主人公の名前決まりました。
クロム・アルデントです。

悪魔V光のドラゴンスレイヤー

俺は今、これからの人生をかけて勝負しようとしている。
まあ、勝つけどね……

「さあ、やろうか。」

新人君。」

「おい、まだ入るって言ってないぞ。」

それに、俺はクロム・アルデントだ。」

「それでは、始め！！」

マスターの合図がかかる。

次の瞬間、ミラが変身していく。

「これは、私の魔法『サタンソウル』だ。」

なるほど、だから人間に見えないのか。

と、思っていたらミラの右手が入っていた。

「痛っ！ いきなり何すんだよ！？」

「戦いはもう始まって居るんだぜ」

ロスト・マジック トワイライトレイ

「それなら、こつちも『古代魔法 夕闇の光』！」

「何！？」

魔法を唱えた瞬間、自分の全身から光が放射される

「『なんだこれ、前が見えない』」「

そう、この魔法は敵の目をくらますことができる

「チッ、これじゃ、クロムのヤローがどこにいるか分からねえ」

シャイニング・フィスト

「今度はこつちからいくよ！ 闘 光 拳 ！！」

「自分の両手に神々しい光が灯る……」

「そんなに光らすと、私にチャンスを与えてるモンだぜ」

「わざとだよ。」

そうわざとだった。

「ごめん、気に触ったなら謝るよ。でも、そんなに気を張らなくてもいいんじゃない？そりゃ、長女だから、そうなのかもしれないけど、

その前にミラは『女の子』なんだよ？もっと、男の子を頼ったら？そうしたらもっとミラらしくなるんじゃないかな？」

女の子？

初めてだった。女の子扱いされたのは……

こんなに優しくされたのも初めてだった。

そう思うと、胸が熱くなった。

「どうしたの、ミラ？ 顔が赤いよ？」

「なんでもない……」

クロムが好きだ。

こんな感情は初めてだった……

「ほんとに大丈夫？」

私のことを心配してくれる優しく、強いクロム。

よし、自分で言ったことだ。責任をとってもらおうと

そして、クロムに抱きついた。

「ちよっ！？ ミラ？」

「エルザなんかに負けたら許さないよ？」

「分かったよ、ミラ」

「よろしいっ！」

「顔赤いぞ、クロム！！」

「黙れ、上半身裸野郎」

「何時の間にい！？」

s i d e : クロム

さつきからきついオーラが後ろに・・・
「私を待たせるとはいい度胸じゃないか」

悪魔V光のドラゴンスレイヤー（後書き）

次回、VSエルザ戦です

光VS騎士(前書き)

久しぶりの更新です
それでは本編にどうぞ

光 vs 騎士

Side: クロム

「さあ、次は誰だっけ？」

「私だ!!」

「うん。よろしくね。」

「えっと……?」

「エルザだ。」

それにお前、私を待たせたことを
忘れていないよな？」

「うん。」

手加減はしないよ」

「もちろんだ!」

「始め!!」

マスターの音が響く。

「換装!

天輪の鎧!」

「……!」?

スゴッ! 鎧が変わった!」

「気が抜けているぞ!

サークル・ソード

循環の剣!」

「うわっと……」

「危ない、危ない。」

「そこだっ！」

ブルーメン・ブラッド

繚乱の剣」

「ぐあっ!？」

やったな・・・

今度はこつちの番だ!」

手のひらに魔力を集める。

そして、エルザの目の前に・・・

「フォトン・ブラスト!

粒子の光爆!」

強い爆風がエルザを包む・・・

そして、エルザが後ろへぶっ飛んだ・・・

「やりすぎたかな・・・」

side:エルザ

あいつの魔法はまだよくわからない。

ミラの際は、地面に近づけただけで

地面を叩き割った。

そして、私を吹き飛ばしたあの技・・・

技を使う一瞬に隙があった・・・

そう、移動速度が遅くなることであった。

そこをつけば勝てないわけない!

「行くぞ！」

サークル・ソード

天輪・循環の剣!!」

「危なっ！」

今のは危なかった……」

余裕でいられるのも今のうちだ。

side:???

「あのガキ、本気で戦っていねえ。

それに、あいつから別の魔力を

感じる。あいつは一体、なんなんだ？」

side:クロム

エルザ、お前ほんとに手を抜く気ないな!?

ほんとに、お前の魔法あぶねえ……

しかし、そろそろけりつけないとな……

「次で終わらす!!」

「何!??」

「古代大魔法

古より生まれしその光・・・

我が身に宿りて敵を倒せ

スターダスト・グリッター

星屑の輝き！」

「何っ！？ きゃあ」

エルザは俺の腕から発せられた

細かい光の粒子にぶつかり、

吹き飛ばされた。

「クロムの勝ち!!!」

side:エルザ

負けた・・・

しかし、気持ちよかった

負けたのにこんな気持ちに

なるとは思わなかった・・・

清々しい、とても・・・

私が、そんなこと考えていると

クロムが話しかけてきた・・・

「おい、大丈夫？」

「大丈夫だ、心配するな」

私のことを心配してくれていたのだな

優しいやつだ、こいつは。

ナツとグレイが私が負けたことを
笑っていたが、あいつら、後で
どうなるか覚えておけよ？

「どいつもこいつもだらしがねえなあ！？」
戦いつてのはこうやるんだよ！！！！」

目の前にラクサスの魔法が迫って来た・・・
よけない、もうだめだ・・・

光 VS 騎士（後書き）

次はまさかのラクスス割り込み戦です。

光 VS 雷 (前書き)

急遽、ラクサス戦です

光vs雷

Side:クロム

「つたく、危ないじゃんか。

遅れてたら重傷だよ？

ってか、あんた誰？」

「俺の名前はラクサスだ。

一応、ギルド最強候補だ。

お前、まだ力隠してんだろ？

出してみるよ、ほら」

「クロム・・・お前私を守つ「エルザ下がって」・・・ああ」

「ラクサスとか言っただけ、こんなところで本気を

出すつもりじゃなかったのに・・・」

後悔するなよ・・・」

「するわけねえだろっ!!」

そう言つてラクサスは雷を飛ばして来た。

僕は動かなかった・・・

「ははっ、直撃かよ!？」

弱えなあ・・・」

「おい、さすがにラクサスは相手にできんだろ・・・」

「ラクサスが強すぎる・・・」

煙が晴れた・・・

「おい、こんなもんか・・・

しょぼいな・・・」

「なら、これでも喰らいなっ!!」

鳴り響くは招雷の轟き・・・天より落ちて灰燼と化せ!!

レイジングボルトオオオオオ!!」

「そんなモン効かん。そろそろ反撃するか……
古代より生まれし闇の力……我に宿れ!!」

カオスソウル

闇の魂!!」

「カオスソウル!？」

「混沌の闇より生まれし力……敵の存在を消すことなかれ……」

カオス・ゼロ

混沌の虚無!!」

「何!?　ぐああああああああああ!!!!」

「これで終わりだ……」

「嘘だろ……ラクサスが一撃で……」
「ありえねえ……」

side:マカロフ

こいつはたまげた……

これがこいつの本当の力……

いや、その一部……

強すぎる……

これじゃ、あやつでも勝てるかどうか……

side:ラクサス

あいつ、バケモンか……

まだ、本気を出さないのか……
これじゃ……あのおっさんでも無理か……

side:クロム

ああ、やつちやた……
一撃でぶっ飛ばしてしまった……
どうしょ……
あれ、エルザが来る……どうしたんだろ？

side:エルザ

クロムが私のために……
あのラクサスを一撃で倒してくれた……
このことで胸がいつぱいだった……
ありがとう、クロム……
そうクロムに言うために……
彼の元へ駆け寄った……

side:クロム

「ありがとう、クロム。おまえのおかげで助かった。」
「いや、俺はただ、自分と自分の仲間を守ることで精一杯だった。それに、エルザがいてくれるおかげで俺はラクサスに勝てたし、闇にも落ちなかった……」

「闇に？」

「いや、なんでもない。ありがとう、エルザ」

「いつ、いや、その、あつと、えつと、

こちらこそ……」

なんで、ミラといい、エルザといい、俺と戦ったあと、顔が赤くなるんだ？まさか、風邪ひいてたんじゃ…….だから、俺でも勝てたのか…….じいさん、お前なんてことを…….

side:エルザ

あいつの笑った顔、優しかったあの頃のあいつに似ていた…….この時だ、私がクロムのことを好きになったのは…….

side:おっさん

おいおい、マスター聞いてねえぞ
あのガキが、ラクサスを一撃でぶっとばすとはよお
こりゃ、俺も本気出さないとマジで死んじゃまう…….
ほんと、あぶねえ…….

光 VS 雷 (後書き)

すみません、何か主人公強い・・・
まあ、次はね・・・

最強のおっさん(前書き)

V S ギルダーツ戦ですっ!!

最強のおっさん

side:クロム

はあ。やっと最後か……

これで僕も晴れて自由になれるっ!!

さあ、頑張ろう!!

side:ギルダーツ

そろそろか……

「それでは、始めえ!!」

マスターの合図がかかった。

side:クロム

「いくよ、おじさんっ!!」

「初対面の相手に『おじさん』呼ばわりか……」

「ラクサスが呼んでたから……」

名前じゃなかった!？」

「当たり前だろ!! そんな名前あるか!

俺はギルダーツだ。よろしくな」

二人は間合いを取りつつ、こんな会話をしていた。

「先手必勝。いくよ!」

クロムは自分の両手に光を灯した。

そして、その右手でギルダーツを殴ろうとした。

しかし、それは通らなかつた……

「こんなもんか……おらよつと。」

ギルダーツがクロムの攻撃を交わし、逆にクロムに攻撃した。

これを皮切りに、クロムの攻撃は一切当たらず、試合は終わった。

正確には、ギルダーツにボコボコにされた。

そして、そのまま気を失つた……

「おい、クロム、クロム。」

誰だ、僕を読んでいるのは……

少し目を開けると、エルザとミラがそこに居た。

「あれ、なんで寝てるんだろう？」

「クロム、お前はギルダーツにボコボコにされたんだ。」

「マジで！？ あのおっさん、弱そうだったのに……」

「何言ってるんだ、クロム。ギルダーツはうちの最強魔導士だぞ！」

「なんだって！？ マスター、俺にそんな奴と戦わせたのか……」

エルザとミラと話しているとギルダーツとマスターがやってきた。

「おう、起きたかクロム。 どうだ調子は？」

「どうだじゃないよ。ボコボコにしたのギルダーツだろ。」

「すまねえ、俺はとも手加減つてのができないんでな。」

「ケガが治ったら、もう一回戦ってもらおうよ。」

「そいつはできねえ。これから100年クエストに行くんでな。」

「100年クエスト！？」

「なんだそれ？」

「仕事だ、仕事。じゃあな」

「ギルダーツ頼んだぞおおお」

マスターが大きな声で叫ぶ。

ギルダーツは右手を上げた。

そして、見えなくなつた。

「そうじゃ、クロム。FAIRYTAILに入ってもらおうぞ。」
「はい、わかりました。(この人、案外せこいな……)」
「そうして、クロムはギルドに入ることになった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4958x/>

FAIRYTAILの世界に転生！

2011年10月29日02時04分発行